

第5回 JLPP 翻訳コンクール 独語部門講評

翻訳家、チューリヒ大学日本学名誉教授
クロッペンシュタイン・エドゥアルド

まず、今回の日本語からドイツ語への「第5回 JLPP 翻訳コンクール」が8年間の空白期間を経て開催され、45名もの方が応募したことは私にとって大きな喜びです。

さらに、応募者全員が時間をかけて今回の翻訳に取り組んだことは素晴らしいことだと思います。

最終審査の対象となった14名の翻訳作品は全般的に見て、相当高い水準に達していました。ですから、今回受賞しなかった方も気落ちすることなく、これを機に日本文学のドイツ語への翻訳に挑戦し続けられることを希望します。

小説、評論・エッセイ部門の翻訳作品を審査するに当たり、私は、翻訳者が原作をよく読み込んで、原作者が作品に込めた思いを的確にとらえ、ドイツ語で表現し得ているか、また、原作の内容を正確に把握して翻訳し、ドイツ語の作品としても評価できるものに仕上げているかを基準に選考しました。

最優秀賞、優秀賞に選ばれた方の翻訳作品は上記の審査基準を十分満たしています。

最優秀賞に選ばれた方の翻訳作品には、ほとんど誤訳がなく、翻訳者はテキストを正確に把握しているだけでなくドイツ語表現も文章の流れに滞りがなく、滑らかでスッキリしていて、読む者を作品の世界に引き込んでくれます。

優秀賞に選ばれた二人の翻訳作品は正確さ、文体の点で、多少問題はあるものの熟慮の跡がうかがわれ、作品としてまとまっていて、間違いなく優秀賞にふさわしい出来栄です。

なお、付け加えておきたいのは、応募者の中に伊藤比呂美の作品中の江戸訛り風な語り口をドイツ語の方言で表現しようと試みた方がいました。翻訳能力は持っているようですし、大胆で興味深い試みではありますが、残念なことに自己流の解釈や翻訳が目につき、原作からはみ出ている箇所が多過ぎて、翻訳作品が原作の翻訳ではなく、改作的要素の強いものになってしまいました。今後の成長に期待することにします。